

尾西鉄道敷設からみた近代の一宮の都市形成

岐阜大学 学生会員 ○則武和幸
岐阜大学 正会員 出村嘉史

1. 研究の背景と視点

1869（明治2）年11月政府より東京-京都間に幹線を敷設することが決定した¹⁾。そして1887（明治20）年5月に私設鉄道条例が公布されたことにより、各地で私設鉄道計画が盛んに行われるようになった。尾張地方において私設鉄道が敷設された都市は、名古屋の他に地方の小都市であった一宮に集中している（図-1²⁾）。1927（昭和2）年時点では、一宮で敷設された私設鉄道は計5本であり、他都市と比べて多いという点で特異である。

一方、私設鉄道条例の施行期間、即ち1887年5月から1900（明治33）年3月までに尾張地方で私設鉄道計画に着目すると、20³⁾もの私設鉄道計画が出されている。ただし敷設までに至った私設鉄道計画は関西鉄道及び尾西鉄道の2計画のみであり、当時鉄道計画の実施が困難であったことがうかがえる。

この内、一宮に鉄道を敷設した尾西鉄道はその後1914（大正3）年8月に新一宮-木曽川間を、1924（大正13）年2月には新一宮-国府宮間を開通させている⁴⁾。当時鉄道は、外部との旅客貨物の運輸を活性化させる役割を持ち、尾西鉄道は一宮の都市形成に多大な影響を及ぼしたものと考えられる。尾西鉄道に着目し、一宮に鉄道を開通させた尾西鉄道の発起人の意図を明らかにし、一宮の近代における都市形成の一要因を捉えることが本研究の視点である。

2. 尾西鉄道敷設後の一宮

尾西鉄道（以下尾鉄と略す）が敷設された時期にあたる明治30年代以降の一宮では、産業の大きな発展が見られた。

まず、一宮にて創業した繊維関連（製糸・織物・紡績・染色）工場の創業累計数（図-2⁵⁾）は、尾鉄が一宮まで延伸した1900年近辺で大きく増加していることを示している。一宮の農業については、例えば尾張物産鶏卵問屋同業組合が鶏卵を尾鉄の貨車によって運ぶ様子が確認された⁶⁾。この尾張物産鶏卵問屋同業組合は名古屋市、春日井、西春日井、丹羽、中島の一市四郡という広範囲の同業者の組合であり、鶏卵を輸送する際に一宮が拠点であったことがうかがえる。公共事業においても変化が見られた。1904（明治37）年3月には一宮郵便局により電話交換事務が始まり⁷⁾、1909（明治42）年には一宮瓦斯株式会社が創立した⁸⁾。



図-1 尾張地方における昭和2年時の鉄道網

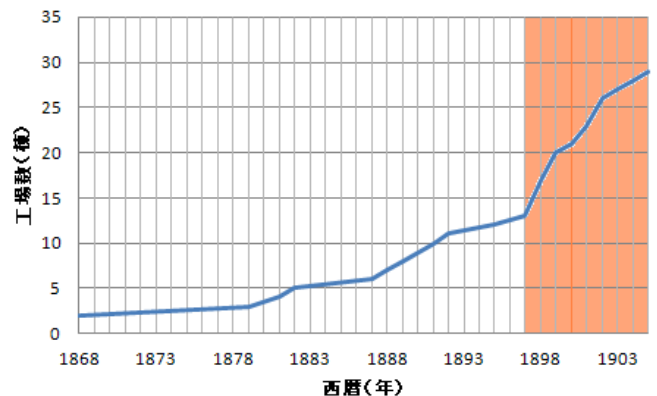


図-2 一宮における工場の操業累計数

表-1 一宮駅・新一宮駅の乗降客数および取扱貨物量

	官設東海道線一宮駅			尾西鉄道新一宮駅		
	a:乗降客数(人)	b:取扱貨物量(t)	b/a	c:乗降客数(人)	d:取扱貨物量(t)	d/c
明治36年	518,649	25,475	0.04912	58,306	2,908	0.04987
明治37年	379,878	23,287	0.06130	51,303	12,542	0.24447
明治38年	423,412	25,891	0.06115	77,475	27,907	0.36021
明治39年	490,383	26,733	0.05451	55,329	7,281	0.13159

このように尾鉄敷設後各面で一宮が発展しており、尾鉄は一宮の都市形成において様々な事象に寄与した可能性がある。

3. 一宮における尾西鉄道の役割

尾鉄新一宮駅と官設東海道線一宮駅の乗降客数及び取扱貨物量を比較すると（表-1⁹⁾）、尾鉄の輸送量はどちらの量も全体的に東海道線より劣っている。しかし両駅を比較するために乗客一人当たりの貨物

取扱量を算出すると、尾鉄の貨物取扱量の割合は東海道線よりも著しく大きいことが分かる。特に、1890（明治23）年の尾鉄新一宮駅における貨物取扱量は東海道線一宮駅よりも多く、尾鉄は貨物輸送を主力にしたと見受けられる。また、尾鉄と接続する関西鉄道は港湾を備える四日市を經由して名古屋に繋がっている。

以上から、尾鉄は一宮から四日市に至る交通の便を向上させ、四日市港との貨物運輸を目論んでいたのではないだろうか。

4. 尾西鉄道株式会社設立時の目論見

尾鉄は初めに、官設東海道線一宮駅近辺から津島を通り関西鉄道弥富駅まで鉄道を敷設した。

しかし、敷設された都市を時系列順にたどると、まず1898（明治31）年4月に弥富・津島間を開通させた¹⁰⁾。その後、1900年1月に新一宮・弥富間を全通させており¹¹⁾、一宮から先に鉄道を敷設していない。また、尾鉄は本社を津島においており¹²⁾、発起人と創業時の役員構成は一宮出身の人物は少なく、津島出身の者が最も多い（表-2¹³⁾）。ここで表-2の備考欄に着目すると、津島紡績の役員を兼ねている人物が多いことが分かる。

津島紡績についてその社長を務めた青樹英二が、原料糸を他地域に依存していた津島の産業を打破しようとした。そして津島で原料綿糸を自給すべく、紡績会社設立を決意したとされる¹⁴⁾。また、青樹英二は津島紡績や尾鉄以外の事業にも着手しており、津島周辺の新興意識が高かったとされている¹⁵⁾。津島活性化を目論むべく、青樹英二が津島の有力者を集い尾鉄が組織されたのではないだろうか。

一方、1898年の尾鉄の目論見書には、次のように書かれている¹⁶⁾。

当會社ハ愛知縣中島郡一ノ宮町ニ起リ同郡萩原村ニ出テ海東郡津島町ヲ經テ海西郡彌富村ニ於テ関西鐵道線ニ接續シ旅客貨物運輸ノ業ヲ営ムモノトス

（傍線は筆者により挿入）

ここで注目すべきなのは、尾鉄は東海道線一宮駅へ接続することを述べておらず、関西鉄道に接続すると記述されている点である。また、1895（明治28）年11月に関西鉄道の草津-名古屋間が開通する以前に、津島は関西鉄道を誘致しようとしていた¹⁷⁾。

以上のことから、開業当初の尾鉄の主たる目的は一宮への動線確保にあったのではなく、津島・弥富間を結び関西鉄道の支線として建設し、津島の活性化を狙いとしたのではないかと推察することができる。

表-2 尾西鉄道の発起人と創業時の役員

氏名	住所地	創立時	備考
青樹英二	海西郡東条村	社長	津島紡績社長
神戸分左衛門	海西郡宝地村		
木村警太郎	三重県員弁郡稲部村	監査役	関西鉄道取締役
水野長一	海東郡津島町	取締役	津島紡績取締役
渡辺新兵衛	海東郡津島町	取締役	津島織布監査役
岡本清三	海東郡津島町	監査役	名古屋電気鉄道取締役
友松元太郎	海東郡津島町		津島紡績取締役
山内民三郎	中島郡祖父江町	取締役	
平林儀左衛門	中島郡一宮町		
土川弥七郎	中島郡一宮町		
宮田慎一郎	葉栗郡佐千原村		一宮瓦斯取締役 一宮電気取締役
天野佐兵衛	西春日井郡新川町	監査役	津島紡績取締役
西川宇吉郎	名古屋市南鍛冶町	取締役	豊川鉄道・名古屋電気鉄道監査役
山田市三郎	中島郡稲沢町		

5. まとめ

一宮に鉄道を敷設した尾鉄は、その外部である津島の有力者の意向が強く、一宮の活性化を重点にしなかったと思われる。しかし、尾鉄敷設により一宮のインフラ整備を進ませ、さらに工業都市化への契機となった。では、なぜ尾鉄が津島にとどまらず一宮まで延伸したのだろうか。津島における利害に着目し、さらにその後一宮に発達する産業形態に着目することで、その理由は明らかにされるであろう。

脚注・参考文献

- 1) 井戸田弘:東海地方の鉄道敷設史 改訂版, 2010, pp.4.
- 2) 吉田初三郎:愛知縣島嶼圖, 吉田初三郎出版部, 1927に附属する「愛知縣交通略圖」の一部を筆者により編集.
- 3) この数字は、井戸田弘:東海地方の鉄道敷設史 III, 2008, pp.174-190の「第4章 第3節 愛知県尾張関係」に掲載されているものの内、私設鉄道条例が適用された計画数と、該当期間に敷設された鉄道計画数の合計である.
- 4) 名古屋鉄道(株)広報宣伝部:名古屋鉄道百年史, 名古屋鉄道株式会社, 1994.6.13, pp.66.
- 5) 近藤哲生, 塩澤君夫, 宮田和明, 井関弘太郎:新編一宮市史 本文編下, pp.306-309.
- 6) 一宮町役場:一宮町案内, 1969.11.27, pp.60-61.
- 7) 一宮町役場:一宮町案内, 1969.11.27, pp.32.
- 8) 一宮町役場:一宮町案内, 1969.11.27, pp.70.
- 9) 近藤哲生, 塩澤君夫, 宮田和明, 井関弘太郎:新編一宮市史 本文編下, pp.320-321に掲載された表を筆者により編集.
- 10) 清水武, 神田年浩:保存版 尾西線の100年, 郷土出版社, 1999.3.16, pp.230.
- 11) 清水武, 神田年浩:保存版 尾西線の100年, 郷土出版社, 1999.3.16, pp.230.
- 12) 第五課商工係:鉄道会社書類, 1898収録の「私設尾西鐵道株式會社起業目論見書」より.
- 13) 清水武, 神田年浩:保存版 尾西線の100年, 郷土出版社, 1999.3.16, pp.31に掲載された表を筆者により編集.
- 14) 橋口勝利:近代津島地域における企業勃興と資産家活動—資産家グループ形成と津島紡績株式会社の事業展開—, 政策創造研究 第2号, 2009.3, pp.69-86.
- 15) 橋口勝利:近代津島地域における企業勃興と資産家活動—資産家グループ形成と津島紡績株式会社の事業展開—, 政策創造研究 第2号, 2009.3, pp.69-86.
- 16) 第五課商工係:鉄道会社書類, 1898収録の「私設尾西鐵道株式會社起業目論見書」より.
- 17) 井戸田弘:東海地方の鉄道敷設史 改訂版, 2010, pp.109-113.